

来年の還暦の時を、 今後の100巻の発刊の時をどう迎えるか

三國雅彦

明治35年4月に発足した日本神経学会(現在の日本精神神経学会)は同時に機関紙である神経学雑誌(現在の精神神経学雑誌)を刊行した。この雑誌は精神病学、神経内科学、心理学、法医学などの領域の原著、実験例を掲載し、精神科医や神経内科医らの会員相互の情報交換に絶大な貢献をするとともに、ドイツ語に翻訳され、欧米の雑誌に掲載されていたといい、わが国の研究業績を世界に発信する媒体としての役割を果たしていたとのことである。内村祐之・元日本精神神経学会理事長の言によれば、第二次世界大戦前までは相当の内容を保っていたが、昭和20年代後半以後になると学位論文の掲載誌の様相を呈し、臨床医家に必要な知識の普及をはじめとする情報交換の不足が目立っていたという。大学や研究所に勤務する者と精神科病院に勤務する者とが日常臨床の経験を語り合える共通の広場を念頭に置いた、新たな雑誌の発刊の必要性を痛感していた有志が医学書院の理解と協力を得て、雑誌「精神医学」1巻1号を刊行したのが昭和34年1月であり、この度平成30年1月に60巻1号を発刊できた。先人の並々ならぬ努力と出版社の英断、何より執筆者、読者の方々のお蔭で今日に至ったことは誠に感謝に耐えない。

本誌の発刊後、精神医学の各専門領域の学会が多数設立され、それぞれ学会誌を刊行し、また、各出版社が複数の精神科領域の雑誌を刊行するようになっているが、本誌は創刊の意図を堅持し、臨床に密着した「研究と報告」「短報」などの原著を中心に掲載し、「展望」では、重要なトピックスを第一人者が分かりやすく解説し、また、年に数回、時宜になった特集、シンポジウム、オピニオンを掲載し、精神科医の臨床の情報交換の広場の役割を果たしてきた。また、「古典紹介」や「継往開来」などのシリーズでは、我々の脳裏から忘れ去られようとする往年の優れた研究者の思想や臨床的実践の紹介を行ってきた。

編集子が36年前に米国のある大学に留学中、昭和51年4月出版の大熊輝雄らによる「二重盲検法による Carbamazepine の躁うつ病予防効果の研究」(本誌23巻4号379～389頁)の論文のコピーを手にした数人の研究者の来訪を受け、論文名だけが英文のため、内容を翻訳して説明してくれと頼まれたこ

とを鮮明に思い出すが、その大学図書館には本誌が1巻1号からすべて揃っていて、国際的な発信の一翼も担っていたことになる。

今後、人口減少が進み、労働人口が激減していくなかで、外国人労働者が増加し、生活支援ロボットが日常生活を送る上で必須となっているはずであるし、日本全体の文化的な背景の変化が著明となっているはずである。医療も診断支援ロボット、手術支援ロボットが普及し、医療技術のレベルを維持していると予想される。一方、個別の人々のこころと身体に対応した、科学的医療の re-humanization が進んでいくことと思われる。精神医学においても、精神疾患の病態解明が進んで、病態生理に基づいた精神疾患の診断がなされるようになっているはずであり、そこではバイオマーカーも活用され、診断支援ロボットの開発も進んでいるかもしれない。原因の究明に基づく根治療法も確立し、ストレス脆弱性要因を、培養自己細胞を用いて修復する技術も開発され、予防法も普及していると予想される。

しかし、人を本当に理解するには問診による精神内界の把握が必須であり、個別の人々に対応した臨床精神病理学的理解に基づく精神科医療が展開されているはずでもある。その臨床経験を論文化するプロセスがさらに臨床力を高める役割を果たすはずであり、本誌の存在意義はいつそう高まっているといえるし、そうあってほしいと祈念している。

本誌が来年の還暦の時を、今後の100巻の発刊の時をどう迎えるか、それまでの間の精神医学の発展にどう寄与できるかを考えて、編集を続けていきたいが、還暦までのこの一年間についても、本誌の発刊のための労をとられた先達の初心に立ち返り、本誌発刊20周年、30周年の過去のまとめも踏まえて、「精神科臨床から何を学び、継承し、精神医学を改革・改良できたか」「精神科医としての私の伝えたいこと」などさまざまな企画を立てて編集していく所存である。今後も日々の臨床の経験に根差した執筆者の方々の玉稿をお待ち申し上げるとともに、読者の方々の忌憚のないご意見を「精神医学への手紙」にお寄せいただきたい。

(函館渡辺病院)